連載企画

OB・OGの職場探訪

㈱バンダイ人事部

杉戸美緒さん（2006年度商学部卒）

オフィスの入り口には、赤色の大きな文字で見覚えのあるBANDAIの社名が人目を引き、棚にはキャラクターのフィギュアやグッズ、ポスターが並んでいた。

訪ねたのは、東京・東品川の高層オフィスビルが建ち並ぶ一角にある真新しいビル。㈱バンダイ本社は浅草にあるが、このビル内には人事関係部門が居を構えている。

笑顔が印象的な杉戸さん

バンダイ人事部人材開発チームに勤務する杉戸美緒さんは、緊張する記者を笑顔で迎えてくださった。杉戸さんは、入社一年目。2006年度（2007年3月）商学部商業貿易学科卒業のOGである。

入社1年で入社案内を企画・制作 チャレンジさせてくれる社風

初対面の記者に杉戸さんが用意してくださったのが、バンダイの入社案内だった。表紙に『バンダイの仕事のカタチ。』とあり、サブタイトルに「『楽しむ』から夢中になれる。『夢中になる』から高められる。」とある。

バンダイと聞くと、「ガンダム」のプラモデルや「たまごっち」などで知られる玩具メーカーと思う人が多いだろう。ところが実は大いに違っていた。入社案内によれば、トイばかりでなく、日用雑貨からアパレル、カードまで幅広く事業を展開する「感動創造」企業なのだ。

オフィス受付で

「このパンフレット（入社案内）は私が企画・制作をしました」と杉戸さんは、誇らしげに教えてくれた。入社早々から、企画をほぼ一人で任され、11月に発行したばかりだという。

入社1年目に大事な入社案内の企画をまかせるなんて…。驚いた。

「当初から会社に、『ものづくりがしたい』と

言っていたこともあって…。『そこまでやるというならやりなさい』とういう感じです。バンダイはチャレンジすると言うならやらせてみようという社風。上から仕事が与えられるというより、自分的にやらせるという感じですね」

デスクワークする杉戸さん

それにしても、よく上司がゴーサインを出したものだが、杉戸さんが周りの先輩の信頼を勝ち取るには苦労もあったようだ。

「パンフレットは自分が学生時代に見たときに堅いイメージがあったので、見るだけで就職活動への活力が沸くようなものを作りたかった」という。

パンフレットには、杉戸さんの言葉通りの発想が活かされていた。大きなカラー写真で社員の明るい表情が目に飛び込んでくるなかに、上野和典社長が一般社員と並んで紹介されている。社長はトップページに掲載されるのが普通だろうに、中ページにさりげなく載っているのだ。

入社早々の人事部配属はサプライズ 自分の特性に気づくことができた

「私はものづくりがしたかったので、人事部というのはまったくのサプライズ人事でした」

入社一年目で人事部に配属されるのはかなり稀なケースだという。だが「いやだという気持ちはありませんでした。入社後のギャップもあまりなく、後悔というのはなかったです。人事部は会社全体が分かります。学生時代に見えなかった視点、ビジネス思考が身につきますから」と杉戸さん。

「バンダイはメーカーですけど、クリエイトするだけでなく、プロデュースをするというのも重要です。つくる人になりたかったのですが、一つの企画のリーダーとなってまとめる人になりたいと思うようになりました。学生の時に気づかなかった自分の特性に気づくことができました」

杉戸さんは、そろそろ採用時期を迎え、自ら企画・制作した会社案内を手に、就職内定者のフォ

ローや会社説明会の企画、それにセミナーのために全国各地を飛び回るという。母校・中央大学にも来られるそうだ。

学生時代から関心ある「ものづくり」インターンではバンダイ落ちる

ものづくりに関心のある杉戸さんは、学生時代は商学部では珍しい日本の伝統工芸を研究するゼミに所属し、伝統工芸に携わる職人へインタビューをしてレポートを書いた。二年生の時には友人たちと服飾文化研究会を立ち上げ、学祭ではファッションショーを行うなど活発に活動していた。アパレル関係に興味があり、アパレルの仕事で接客のアルバイトもした。

マスコミ、広告業界にも興味があり、キャリアセンターのマスコミ就職セミナーを受講するなど、自分の将来を模索しているうちに、バンダイと出会った。

「中央大学のひとつ上にバンダイの内定をもらった先輩がいたので、いろいろと質問をしました。その先輩や、他の社員の人柄を見て、このような人がいる会社は働いて楽しいに違いないと思いました」

自ら企画・制作した入社案内を手に

「ものづくりがしたかったので、バンダイはカテゴリーが広く、何でもできる。その点マスコミ、アパレルと似ている部分もあります。人を楽しませることもできるし、やりたいものづくりができるのではないかと思いました」

就職活動について聞いてみると、「学校名は関係ありません。それより何をしたいか。企業はその人の人間性をみます」と明確な答えが返ってきた。

わずか一年半前には就職活動をしていた立場だったのが、採用側に180度変わった杉戸さんだけに説得力がある。そして意外な事実も聞かせてくれた。学生のときのインターンシップでバンダイを受けたが、落ちてしまったのだという。

「正直ショックでした。でもそれで逆に決意ができました。インターンをしましたというのが大事ではなくて、そのインターンで何が変わったかを企業側は聞きたいんです。インターンがダメでも関係ありません。ありのままの自分自身をみせることが大事だと思います。面接では自分の言葉で話すことです」とアドバイスをくださった。

目標は『宝物』づくり

最後にこれからの目標をたずねてみた。

「誰かの宝物をつくりたい。だからまだ具体的ではありませんが、やはり開発に携わりたいと思います。人事部では、杉戸がいてよかったと思われるような仕事をしていきたいです」。入社1年で入社案内作成を手掛けたように、きっといつか『宝物』をつくるに違いない。

（学生記者　伊藤知広＝経済学部2年）